

淨土

1977-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物)
昭和二十四年四月二十八日 滞郵省 (特別送達郵便物)
昭和五十二年十一月二十五日印刷 第四十三卷 第三号



S. K.

帰って来た梵鐘

品川寺の大梵鐘

幾百年にわたって^{おが}拝まれてきた仏像や、親しまれてきた梵鐘には、不思議な履歴と逸話をもつものがある。

京浜急行の青物横丁駅に近い品川寺（真言宗醍醐派）の大梵鐘は、重要美術品というそ

の立派さもさることながら、それにも増して数奇な履歴をもっている。東照宮、台徳院殿、大猷院殿と徳川三將軍の号を刻し、その冥福を祈願して鑄造されたという。徳川家の繁栄と勢力を象徴したこの名鐘も、徳川政權の崩



東京・品川寺の大梵鐘

壊とともに、海外に流出し、各地をてんでんとして、いつしか行方がわからなくなった。大正八年になって、偶然にもジュネーブ市のマリアナ博物館に収蔵されていることがわかった。住職の熱心な請願と関係者の善意によって、昭和四年によりやく返還が実現し、実に七十年ぶりに故地に安置された。

このできごとが機縁になって、先代の住職は、半鐘を作った戦没者の霊を供養することを発願した。半鐘をしかるべき場所に寄贈もした。返還から半世紀の歳月が過ぎ住職も次代に移った。現住職も先代の意志を継いで、マリアナ博物館に念願の表啓訪問をはたした途上、半鐘をローマ法王庁に寄贈して、キリスト教戦没者の霊にささげた。

徳川から明治、大正、昭和と時世の変貌するなかで、この名鐘は、一時は異国に流浪する不運を経験した。しかし、その不運の経験が逆に人の善意を生む機縁となった。数奇な履歴をもつ名鐘ではあるが、そんな自分の履歴をまったく知らずに、今年も無心に除夜の時をつげる。

十二月号



昨日もいたずらに暮れぬ、
今日もまたむなしく明け
ぬ、いまいくたびか暮ら
し、いくたびか明かさん
とする ——『登山状』

目 次

法 話

自分のもの……………吉 田 昭 炳……(2)

とるに足らぬことではあっても

—本年度を回顧して—……………高 橋 良 和……(6)

<ふるさと紀行>師走の京都……………戸 川 霊 俊……(24)

いのちを考える⑨<自然>

草花のいのち……………藤 井 利 重 ……(10)

七里ヶ浜の夕日……………松 本 国 雄 ……(14)

一遍上人について……………長 島 尚 道……(19)

<一冊の詩集>『青いたそがれ』(吉水まさみ著)……………(30)

<読者の声>信仰への道

法然上人の問答から教えを求む(≡)……………吉 村 孝……(32)

<表紙裏・巻頭言> 帰って来た梵鐘……………佐 藤 成 順

念仏ひじり三国志⑭——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄 画

カット 大正大学美術部



＝ 法 話 ＝

自 分 の も の

吉 田 昭 炳

(金沢市如来寺住職)

○ 師 僧 の 金 言

私は石川教区浅の川組玄門寺第二十三世の法灯を継承したのが昭和二十二年十一月三日、今から丁度三十年前のことでした。

敗戦後の動乱期、国民は生きること、精一杯の時期でしたから晋山式と云っても至極簡素でしたがしかし厳粛に行われた。

儀式が終りホットしていると師僧である故吉田善堂師

が住職の心構えを教えるから方丈の間に来るようにとのことであった。

厳格な師匠だからどんなことを云にれるのか内心びくびくしながら坐っていると、「吾が寺の本尊様はこの寺の仏様よりも立派なんだと思ってお給仕なさい、これが住職の心構えのすべてです」と云われた。

私はもつとむづかしい、固苦しいことを云われるのかと思っていたら案に相違して簡単に終わった。

こんなことなら只今、今日からでも実行できると思ったが師僧の真意が解るまでに三十年の長い年月がかかっ

た。

ある時には自分を優先させてお給仕を忘れ、ある時には生臭いままの身体でお給仕したこともあった。

本尊様の前に坐わると平生思ってもみなかったような妄念が雲のごとく湧き出してくるし、心が乱れ散る。

念仏はほれほれと申すのが一番よい念仏だと聞かされているが、仲々そのように申されない。

経文には「歓喜勇躍して善心生ず」とあるが、善心なんか一向に芽生えてこない。

暗中摸索、てきぐりしながら本尊様に仕えていたので一生懸命お給仕していたと云えば嘘でしょう。

○自分のもの

宝間比丘が釈尊に「どうしたら悟りを開くことができましょう。悟りへの近道を教えて頂きたい」とお願いすると、釈尊は「自分のものに非ざれば取るることなかれ」と答えられた。

若い時には、「自分のものに非ざれば取るることなかれ」と云うことと悟りとがどんな関係になるのか深く考えも

せず、只すらすらとその個所を読み通して来たが、近年ちよつと引つかかるものを感じ考え込むようになった。さらに自分のものとは何んだらうと真剣に考えるようになった。

こんな簡単なことをこの年令になって考えるとは何んとか愚かなことだろうと思われましようが、私にとつては重大なことだったのです。自分のものとは何んだらう？ いやしくも自分のものだと云い切るには先づ自分自身が造り出したものでなければならぬ。

自分のものだと確信するにはそうなるまでの原因結果が是認できるものでなければならぬ。

自分のものですと確約するには最後の最後まで身に附きまとう必然性がなければならぬ。

このように考えて来るとこれが自分のものですと断言できるものに何があります。

この生身の身体これこそ自分のものだと思っているがこれは両親が造ったものです。

生命は仏様から授かったものです。自分で造ったものではない。

あれだけ執着した財産すら自分の思うようにできず、

最後の最後まで身に付きまとうものでないからこれとて自分のものではない。それでは自分のものとは何んだらう？

最後の最後まであの世まで持つて行けるそんなものこそ自分のものだと言言できるものです。

そんなものが果してあるんでしょうか？

あるのです。

それは業と云うものです。

業こそ自分が造つてあの世まで背負つて行かねばならないものなのです。

面倒な業になつて生きて行かねばならない自分の心底を覗くときどうしようもない私が生きている、こんな私でも見捨てないで救つて頂き度いと心から願うのです。

○愚痴にかえる

源信僧都の『横川の法語』に、

「妄念もとより凡夫の地体なり、妄念のほかに別の心は無きなり、臨終の時までは一向に妄念の凡夫にてある

べきぞと心得て念仏すべし」

とあり人間の本性をズバリと説いている。

妄念が人間の本性であり、妄念の外に別の心がないのであるから人間の心は善い時も悪い時もみんな迷いなのです。

こんな迷いに振舞わされて毎日生活しているのだから、悪業を積んで生きて行かねばならないのが吾々の運命なのです。

これが私達の偽りのない姿なのです。

人間の本性が解らず、業に気付かないから愚痴だと思われないのです。

極端な云い方をすれば、愚痴なものだと解らせて貰えないほど吾々の業が深いと云うことです。

智慧第一と云われた法然さまが何故自分のことを「愚痴の法然房」と云われたのでしょうか。

業のことを真剣に考えると、自分は何んと愚痴な者だと気付かれてするように云われたのだと思う。

だから愚痴にかえるとは自分の業を気付かせて貰うことだと云つて過言でない。

業に気付くことが愚痴にかえることであり、愚痴にか

えることが悪人と云うことです。

悪人こそ救済にあづかる第一番目の対象者、即ち「悪人こそ正機である」と念仏の祖師方は強調しておられる。

どうしようもない私を何度も何度も見つめることが信心につながる道なのです。

『安心決定鈔』に、

「人間が往生させるならば信も浄も必要であるが往生は仏の本願力によってなされるのである。人間の力に在るのではない。だから人間の善悪・淨穢・智鈍・信疑などの差別は本願の妨げにならない。人の心は善い時も悪い時も迷いなる故に出離の要とはならず、南無阿弥陀仏が往生するなり」

と明確に云い切っている。

法然さまはもっと端的に、

「我等が往生はゆめゆめ我が身の善悪には候はじ。ひとへに仏の御力ばかりにて候べきなり」

と断言しておられる。

念仏は安心して申すもの、安心せず申してもそんなことに関係なく往生は本願力によってなされるのである。

良忠上人は、

「口に称うるも名号、心にて念ずるも名号なれば、いずれも往生の業とはなるべし。ただし私の本願は除名の願なるが故に声を立て、喝うべきなり」

と云っている。

妄念が湧けば湧いたままで、心が散乱すれば散乱したままで声を出してお念仏していると自然に念仏がお念仏になって来るのです。

こんな心底で本尊様にお給仕していると、「吾が寺の本尊様はこの寺の仏様よりも立派なんだ」と云うことが解ると同時に、文字通り一生懸命お給仕できるようになり、どこの寺の本尊様も立派に見えて来るから不思議なことです。

私は師僧吉田善堂師死去後師跡を継ぎ、如来寺の住職になりましたが、住職の心構えを教えられた師匠の金言の真意が解るまでに三十年かかったとはほんとうに愚かな弟子でした。

去年十月十六日有縁の方々が相いつどい七回忌を厳修致しましたが、私は心よりお詫びしたい気持ちで一杯でした。

とるに足らぬことではあつても

—— 本年度を回顧して

高橋良和
たかはしりょうわ



プロ野球の巨人の王貞治選手が、アメリカのハンク・アーロンのホームランを抜いて、七百五十六本打って、世界のホームラン王になった。国からも表彰をうけたし、プロ野球だけでなく、日本人にとつても、うれしいことであつた。本年のニュースとして、全くすがすがしいものである。

そして夏には有珠山が何度も爆発した。遊覧客は、しばらく山の近くにいくことが出来ず店も閉じて避難していたが、やっともとの通りにおちついたということである。

社会のニュースとしては、このようなものが本年の大ニュースのなかに、加わるものであらう。

然し我が浄土宗をふり返えてみて、王の七百五十六本に迫るようなニュースは無いし、そんな大ニュースが、宗教界で生れるわけでもないだらう。また生れたら大変である。

教団というものは、社会では目にもふれないようなことだつて、その教団にとっては、実に大切なことだつてあるし、社会においては小さな小さなことであつても、教団にとっては大事にしなければならないことがある。

あるとき、ある本山で、何か新しい動きや、ニュースがありますかとたずねたら、「そんなものが、本山にあったら大変ですよ、なにも動きが無いのがよいのです」と真剣な顔で語っていた執事長がいた。

まことにその通り、そうかといって、それがマンネリズムになったり、全然刺激がなくて、馬の耳に念仏の如く、世の中の風と無関係である教団であれば、それこそ社会から遊離しているということになる。

社会の動きや、世の中の風をよく知りながら、その教団の運営や、もっと詳しくいうと、教化や、布教が、時代的に考えられなければならないのである。

一年は瞬くうちに過ぎてしまった。

宗教界という広い世界でなくても、仏教界にも、やはり、事件やニュースがある。

然し実際にふり返えてみて、やはり世の中の風が冷たいと同じように、仏教界にも、心のあたたまるような動きが、少なかった年であったと思う。

実際は、それであってはいけないので、世の中に木枯風が吹くときでも、教団から吹く風は、春風駘蕩であってほしいと思うが、どうもそうでないらしい。

京都のことである。京都は観光寺院が多いことは、御存知のことと思うが、その苔寺の拝観料が、三千円ということである。元来苔寺は、境内一めんの苔がその観光となっているのであるが、終戦後は、谷崎潤一郎の「細雪」の小説から俄然脚光を浴びて、京都へくるならまず苔寺へ、ということ、どっと洛西のこの名利に押しよせてきたのである。

苔の手入れはどのようにすればよいか、そのことは素人であるが、あれだけくれば、境内や、建物の保管と修理が、大変であることはわかる。

そこで住職は、予約制をとって、遠距離からの来山者は、まず前もって申込みをして、その時間に赴くと、苔寺に入寺することが出来る、ということになっていたところ、それでもわんさ押しかけるということからであろいか、やはり苔がいたむ、その手入れが間に合わない、ということから遂にこのような拝観料になったらしい。現在それを守っているのかどうか、ちょっと疑問ではあるが、ニュースで大きく報道されていたのは事実である。

高い拝観料ということなのか、それがために観光客が抵抗をもったのか、最近の苔寺へは、全く人がまばらで

あつて、附近の土産物店は、店をたたんだということ、それに近くの観光寺院でも、苔寺に便乗していたところは、めっきり観光者がこなくなつたとか。

観光者にも仏縁をあたえて、仏の心をつたえるという広い意味の教化や、布教からすると、安い拝観料で入山させて、仏縁にふれさすことも伝道の一つである。と思うが、高い拝観料で人のくるのをよるこばない、という寺の態度が、果たしてどのように影響するのか、試金石というほどのことも無く、やはり京都の話題から当分消えそうにもない。

京都の洛北三千院は、ここも正月から年末まで、全く観光者でいっぱいであるが、今年の初夏から拝観料を三百円に値上げした。ここまでくる人には、百円の値上げぐらいは、ビクともしないだろうが、さてこの百円の値上げは、そのまま人材養成につながつて、この三千院から天台宗の人材養成の基金として、金三億円を教学財団に寄附したのである。

一寺院から、一宗団の人材養成基金ということで、世間の目から、別にとりあげられたことはなかったが、ややもすると、名利や、古刹が拝観料の上に、どっかりあ

ぐらをかいて、左うちわの生活をしているところがかなりあるなかに、この名利が、それを人材養成の淨財として活用した点は、今年の仏教界のニュースで、大きくとりあげてもよいのではないだろうか。

三千円の拝観料と、三億円の人材養成基金ちよつともいろいろ対象があるといえる。

十一月になつて京都の東本願寺に、爆弾さわぎがあつて、神聖な大師堂が損傷して、世人がおどろいた。もちろん大事件である。仕掛人は何ものなのだろうか。それは警察当局にまかせることにしたいが、この本山でも不渡手形や、訴訟問題などで、世間からとかくの批判をうけているときだけに、今後の本山の在り方や当面する問題について一つの反省の材料となるのではないかとも思う。よき機会とは、あえて言わぬが、爆弾事件が、脚下照願の機会となれば幸である。

天理教にもこのような事件があつた。

それは神殿をめぐる作礼拝殿に、うらみをもつて放火した男がいた。量一、二枚を燃いた程度で、大事には至らなかったのであるが、天理教の幹部は、この事件を非常に大事にした。いわゆる神さまのお手入れである。神

さまのお心にそむいて、ここに神さまのおしえをひろめて、世界たすけの道をおろそかにしていたので、神さまからの御注意である、とうけとって、神さまへの奉仕はもちろん、その布教活動、陽気ぐらしという世界人類救済のおしえを更に徹底して布教伝道しよう、と訓令を出し天理教を仰ぎ、それを誓い合ったことがある。

両者を比較することの次元の異なりを指摘されると、問題はあるにしろ、やは他山の石とすべきことであらう。

他教団のことを記したが、おそまきながら我が浄土宗にも、年末をひかえて、うれしいことがある。

それは黒谷浄土宗と、本宗との合同実現である。宗団の分裂した事例はあっても、復帰した例はほとんどない。これは覆水盆にかえらずとの諺の如くであるが、本宗の分裂は、うれしいことに、いずれもみな合同をなしてあげているのである。

そして最後に、黒谷浄土宗との合同実現をやりとげた。まさに分裂して三十一年目のことである。分派した黒谷浄土宗寺院の数の問題ではない。一味乳水の流れている。

「もたいなや親仰は法衣の九十年」は、句仏上人の句であるが、親仰の御苦勞を思いかえして、その流れのなにかにかえってくる、その心が大事なのである。

もっと大きなニュースは、仏教界にたくさんあるかもしれないが、小さくてもよい、心あたたまるニュースは、この黒谷との合同問題を、本年最大のものとして取り扱いたい。

なんでもない会社の合併や、増資にくらべると、取るに足らないことかもしれないが、仏教界にとっては、大きな成果である。

教団とは、そんなもので、小さなことを大事にして、大きなことを更に意義深くうけること、それが仏教であるといえる。

つまらぬことが、やはり大事される教団であればこそ、世間の人々は、その教団への関心が異なってくると思う。

教団は、世間なみであっては、いけない。

どこかにそのジャンルが異なっているところが、世間の魅力といえるだろう。

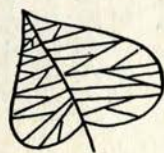
いのちを考える

(九)

— 自

然 —

草花のいのち



藤井利重

(東教大名誉教授・農博)

「花のいのちは短かくて……云々」と、女流作家 某氏の名文句が人口に膾炙しているが、命の短い植物ばかりを好んで眺めるから、斯様な台詞が出来上るのであって、つい先頃まで庭に咲いていた百日紅(さるすべり)とか百日草(ジニア)等を眺めておれば、きっと、「花のいのちは長すぎて……云々」となり、その後は続かなかったと思う。十月末になりいまだ咲き残っている朝顔は花は少さく

なり、色もさえず恥しそうに咲いている。それでも、朝になり明るくなると開花し、昼前には凋れている。夕顔は夕影から咲き出し、翌朝は凋れている。花のいのちの短い方の代表的なものであろう。月見草は誰が名付けたかは、知らないが、これほど科学的な名称は珍しい。七・八月の日の長い暑い夏に、月の出の早い午後には既に咲き始め、翌朝、ありあけの月の時にも咲いている。然も、長い花

穂を下から上に咲き上げているから、期間も長い。命の長い花である。ところが世間で言う黄色の割合大きな花の咲く月見草は、実は本名は「おおまつよいぐさ」である。この「まつよいぐさ」が、いつの間にか、「よい」と「まつ」がひっくり返されて、「宵待草」になり、詩の中にだけ、生きるロマンチックの花に化けたと思われる。真当の月見草は白花のものである。どれも北米原産である。白花の月見草は園芸植物として、勢々堂々と輸入されたが、「おおまつよいぐさ」は何かと共にこっそり、我が国にもぐり込み、その旺盛な生活力で、今日では、全国至る所に見られ、肝心の月見草の御株をすっかり奪い、あまつさえ、その名前まで自分のものとしてしまった。この強心臓に圧えられ、真当の月見草は、今日では殆んど見られなくなった。

この点、月下美人とよばれるシャボテンの仲間、開花期は、七、八月と「まつよいぐさ」と変らないが、夜の七時になり、月が出

ても決して開花しない。九時、十時となり、暗くなつてからやっと開花し、翌朝は凋んでいく。この点私や「夜咲く酒場の花」と相似ている。

以上のように、命の短い花の方が案外少く、一日だけしか咲いていない、我々が「デュー・フラワー」とよんでいるものは沢山存在する。日光国立公園尾瀬ヶ原の名物の「ニッコウキスゲ」などがこれである。尾瀬の写真を見ると年中咲いているようであるが、これは一茎に十数輪の花をつけ、これが毎日交替して咲いているのであって、眺める方は、同じ花と思っているが、眺められる方は、毎日代っているのである。花の命は短くて長い。

あでやかで美しい花自身は、人様からお誉めのことばなど貰おうなどは、夢にも思っていない。蝶や蜜蜂のたぐいの目を引いて、その訪れを待ち、月下永人の役をはたして貰お

うと、競って濃麗な色をつけ、芳香をはなっているのである。温熱帯植物の洋蘭は、特にカトレアなどは生花の中では最高の美しさを持つものである。ところがこのカトレアは、一輪の花が二〇〜三〇日位咲いている。切花を買うならば、これ位花持の良いものは他にないから、一輪数百円はするが一日当りにすればこんな安い生花はない。

開花期間から言えば、カトレア位美しい花のくせに昆虫から嫌われた植物も珍しい。月下永人の訪れを何日を待っていて、月下永人が訪れると数日間には凋んでしまう。凡人は美人にまどわかされるが、蝶や蜂類は美醜には、無頓着らしい。人間社会では、美人薄命と言われるが、植物仲間は美花長命でないともてはやされない。蘭類は一般に一花が長命であるが、一花が短命のものは次々と咲いて結局長命でないと尊ばれない。このことは、花の品種改良の一つの条件になっている。

花が少なかった昔は、お盆の御供之花と言えば、千日草が中心であった。雛の卵大の球形をした紫色の花でなつかしい草花である。近年は、お盆の頃でも他に美麗な花が沢山あるのであまり省みられない。ところが名前の通り、茎が枯れても花色は褪えず、それこそ四日にもっている。この色は長持ちするはずで、花卉の色でなく苞の色である。今日流行のドライ・フラワーの先達である。この点「むぎわらぎく」などは、ドライ・フラワーが目的で改良されたが、近年は人工的にドライ・フラワーを作りこれが盛んに「いけ花」材料に使われている。日頃、生花ばかり眺めている筆者にとっては、ドライ・フラワーと造花特にホンコン・フラワーとよばれている造花は、あたかも、年を隠した商売女が厚化粧して、客席に現れて来たような気がして、憐れと言うよりも、醜さが先に立つ。

花の長い、短かいは別として「花は桜木、人は武士」とて、桜の花の散りぎわの見事なことを称えたように言いふらしたたが、これは封建時代、忠君愛国時代の社会で、無理に命を惜しがらせない為の政策のためスリ換えたもので、はじめの意見は武士は桜のように清潔であれと言うことであつたとか、少くも散ることではなかった。この点では、

小倉山峯のもみじ葉心あらば

今一度の御幸またなむ

とよんだ藤原忠平(貞信公)の方が、遙かにヒューマニティー豊かである。

「菊は二度咲き、葵は枯れる」と言う文句は、皇政復古を称えた一世紀前の革命児の凱旋辞である。御両家の紋章を代名詞に使用しただけで、菊も葵も毎年咲いている。然も、

徳川家の紋所となった「ふたばかんあおい」は春に、これに極似の「まるばかんあおい」は、冬になつても咲いている。結局、葵は年中咲いている。尤も、葵の花は地面にこびり付くような姿で咲いているので人目につきにくい。濃い紫色の巾着型のユニークな花である。この花は、人間は勿論、蝶や蜂にも媚を売らず、専ら蝸牛に月下永人の役を御願いしている。虫媒花でなく、蝸牛媒花と言う珍しいものである。

面白いことには、蝶の標本の蒐集家の垂涎多々のものにギフチョウと言う珍しく美しい蝶がいる。このギフチョウは「かんあおい」だけが餌である。蝸牛がいなくなつたら「かんあおい」の種子は出来ず繁殖することは出来ない。この「かんあおい」がなければ、ギフチョウの卵虫は育たない。「風が吹けば桶屋が貰かる」式に、世の中は持ちつ、持たれて生きているのである。

最近の自然愛護を叫ばれる人達の中には、目先の特別の一つの昆虫や一種の花を取り上げて、保存や保護策を大声にする人がおられる。筆者は、何も、この事には反対はしないが、例えば、蝸牛の棲み難い自然を作っておいてギフチョウの保護を如何にはかって、その目的は十分に達しない。

人間社会は勿論、動物社会も植物社会も、

七里ヶ浜の夕日



自分だけで生存を続けるものではなく、或るバランスを保つためには、時には、殺し合い、時には、別々に離れてお互い繁栄しているのである。この為にお互いに定まった「いのち」があるものと思っている。

いのちの短い花もあるが、また前述の百日草など、色があせてもなお、咲き続けて、逆に愛想つかれる程のものである。これが生物界の宿命と言うものか。

まつもと
松本 くに
（作） 雄 家

和辻哲郎博士は、われわれに『風土』（人

間的考察）——という一冊のすぐれた書物をも

こしていつてくれた。

おそらくこの本は西田幾太郎博士と共に「東洋思想」を濃縮した代表的な遺産として稀有な著述である。

和辻博士は、この書物の冒頭で次のように述べている。

——この書の目ざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである。だからここでは自然環境がいかに人間生活を規定するかということが問題なのではない。通例、自然環境と考えられているものは、人間の風土性を具体的地盤として、そこから、对象的に解放されて来たものである——と述べ、更に——たとえばここで風土形象が絶えず問題とせられているとしても、それは主體的な人間存在の表現としてであって、いわゆる自然環境としてではない。この点の混同はあらかじめ拒んでおきたいと思う——と述べている。

ところで、今、私がここであえて取りあげ

ようというテーマは、和辻博士が拒んだところの、私たちを主体性としてのものもろもの「形象」との関係について、あるいはその対象と対象との——もつと即物的に言えば空気が魚や鳥や、その他のいわゆる均勢のとれた生態系（エコロジイ）のなかの一員として、いか人間がこれを正當に評価し、認識してゆくに興味を傾けてみたいとおもう。

これを更に具体的に敷衍すれば、なにかの文章のなかで、団伊玖磨氏が書いていたように——ある風土っていうものがあって、それが鳥をも花をも、人間をも同じような好みにしていくのか、どっちなんだろうってことで。花は野に咲いています——という問いをスタートラインに……。

○

毎年、十一月、十二月と、それもあるべく歳末も押し寄せまった海浜の風土のなかに、私はすばらしい調和のとれた美しさに息づまる

体験をもつ。それは七里ヶ浜から腰越の海づたいに眺める夕日の景観であり、そのクライマックスに達した夕ばえのなかに、一瞬、周囲の生態系がもの音一つなく凍結される寸秒の風景である。

その一瞬の「景観」との出会いを求めて、この季節になると私は七里ヶ浜を彷徨するのがここ数年の習慣となった。

はじめの頃、この夕日との出会いは偶然という瞬間、あるいは瞬間のなかで見すごされていたのだが、そのたびたびの出会いに驚き、注目するようになったのが、ここ七、八年という次第で、これは観望者としての私の年齢と関連するのではないかとようやく気がついたのである。

人間が終末観の「美」をあこがれる心理的な願望が、自らその自然のなかに求め、憧憬するのが、むしろ当然のことかもしれない。

○

さておだやかな日に恵まれると、その日の夕日の美が期待できる予兆である。最近ではこの時間まちの要領も考慮にいれて、柔かめの投げ竿を一本持参して、腰越駅から七里ヶ浜まで磯づたいに走っている江ノ電にのって二駅を遠征することになっている。

人家の軒下をヴー、ヴーと警告しながら七十余年も走りつづけている、この古風な江ノ電は、最近たいへんな人気で土曜、日曜にはわざわざこの電車に乗るためにやってくる観光客で満員である。

しかし無人駅の七里ヶ浜で切符を車掌にわたして砂丘の防風林をぬけると、すぐ湘南ハイウエー。上下目白押しにならんで辛捧づくくだらだら行進している車のあいだをすり抜けて浜べりに出ると、その貧相な防風林のなかに砂に埋れたしゃもじ型の西田博士の碑が建っている。

まるで砂のなかから生い出した巨大なきのこのようにもみえるし、なんとも奇妙きてれ

つな格好だが、イサム・ノグチの作品だそう
で硬い大理石でできている。

碑面には「寸去」という西田博士の雅号が
てん刻されており、

七里浜夕日漂ふ波の上に伊豆の山々果し知
らずも

——と五行に刻まれている。

つまり七里ヶ浜の「夕日」讃仰者の先輩の
記念碑ということになる。きつと西田幾太郎
博士が、この歌によみこんだ夕日を、きよう
私はこれから観賞しようというわけで、私は
先輩に礼をつくしてちょっと碑前に目礼をし
て浜に降りた。

夕日のご送迎までは、まだ数時間もあり、
その間、私は持参した釣り具をあやつってし
ばらく遊ばせてもらうという寸法である。う
まくゆけば落ギスとの活発な対話ができる
し、海がおだやかなれば波打ちわにあつまっ
てくる白ギスの大群とのあいだに賑々しく対
話が交わされる幸運にも恵まれるというチャ

ンスがある。私のこれまでの体験では、白ギ
スたちもやはり私の立っている足許まで一直
線の朱紅となって夕日漂う波の下に好んで蟬
集してくるのではないかという空想すら湧い
てくるほどで、その朱に染った波間から白ギ
スが釣れてくるのである。

すばらしい自然のコントラストである。

○

やがてバラ色の美しい夕映えがはじまる。
遠く対面する江の島ヨットハーバーの防波
堤の尖端にたっている灯台が、黒いシルエツ
トとなって海面へ投じ、その背景に富士が薄
墨で描いたようにすっきりと音もなく坐して
いる。真円、朱紅色の太陽はいよいよその輪
郭をくつきり中空に浮き立たせ、それが刻々
と濃朱色から次第に紫紅色へと移ろいはじめ
ると、やがてその余光と私の立っている海浜
とが一本の紅い光線で結ばれる。

その瞬間が最高潮であり、波間に投げこん

である釣り竿のさきに、白ギスがしきりと信号を送っているのも忘れ、私は茫然自失し、恍惚の境にひたるのである。

この変幻する一瞬、一瞬は息をのむばかりである。海面は全く無風、もしそのとき少しばかり浮雲があれば、夕映えはその不規則な変形雲に乱反射し、燃え立つようなカラーフラワーを描いてけんらん豪華を極め、その一瞬は地上の騒音もうごきもびたりと停止して凍結されてしまうのである。

カメラのメカニズムなど到底およばぬところであり、人智の卑小などは問題外というべき瞬間なのである。

私は、この夕日礼讃をおよぼざる人間の終末感の憧憬がさせる願望——とんかんの文章に書いたことがあるが、自然と対比して人間と含めたすべての動物の終末はすべて醜怪なものであり、なぜ動物にだけに老醜を与え給うたか、神がうらめしいほどである。

——満目錦繡の秋の自然／いかんせん、人

生の秋の／かく華麗ならざることを——という嘆きもある。しかし、人間はその老醜をいかに克服してゆくかという努力も、結局、自分自身に帰納する命題である。

○

ともあれ、とかく自然美に照応した一日は心地よき疲労に充される。そして、もしさやかな晩酌の卓に二、三の白ギスのあつものでも添えてあればわが一日は上々ということになる。

新刊『共励五十記帖』

B4判 一六〇頁(ケース入り)

表紙 ワインカラー裂地金文字題字

頒価 一〇、〇〇〇円(荷造送料共)

申込先 〒108 東京都港区三田4-4-17

書 道 共 励 会

(振替東京 七七四四七)



一遍上人について

なが
しま
しょう
どう
長島尚道

(大正大学助手)

法然上人による専修念仏は多くの人々の注目するところとなり、次々に念仏宗が生れた。鎌倉時代に起った念

仏宗の中でも、一遍上人を祖師と仰ぐ時衆教団は、その徹底した念仏信仰と賦算（お礼くばり）という独特の行を通して、北は奥羽地方より南は九州大隅にいたるまで遊行廻国し、念仏の教えをひろめた。二祖他阿真教上人によつて教団が嗣がれてからは急速に発展し、当時、最大の信者数をほこつたともいわれている。

一遍上人が遊行廻国しようとしたのは、念仏の算札をひとりでも多くの人に渡して結縁させるためであつた。より多くの人々に念仏の札を与えるには一ヶ所に留まることなく、積極的に歩き、行き合う人々に札を手渡

さなければならぬ。実に一切の場所を捨てて、死ぬまでその長い遍路の旅を続けたのである。

一遍上人はつねに空也上人の徳を慕いつつ遊行している。

「空也上人は吾先達なりとて、彼御詞を心にそめて口ずさび給ひき」『一遍聖絵』

また、空也上人を例にひいて、『興願僧都に与えし消息』の中で、

「むかし、空也上人へ、ある人、念仏はいかが申すべ

きやと問ひければ、捨ててこそとばかりにて、なにとも仰せられずと、西行法師の選集抄に載せられたり、是れ誠に金言なり」(『一遍人語録』)

の言葉にあるように市^{いち}・聖^{せい}・空也上人に対して、一遍上人は捨聖と呼ばれていた。

一遍上人はつづいてこう述べる。

「念仏の行者は知恵をも愚痴をも捨て、善惡の境界をも捨て、貴賤高下の道理をも捨て、地獄をおそるる心をも捨て、極樂を願ふ心をも捨て、又諸宗の悟りをも捨て、一切の事を捨てて、申す念仏こそ、弥陀超世の本願には、かなひ候へ。かやうに打ちあげ打ちあげ、唱ふれば、仏もなく我もなく、まして此内に兎角の道理もなし。善惡の境界皆浄土なり。外に求むべからず、厭ふべからず。よろづ生きとし生けるもの、山河草木、吹く風、立つ浪の音までも、念仏ならずといふことなし」(同上)

このように一遍上人は、なにもかも捨て去ることに徹

した。また、同じ『語録』の卷上には、宝満寺で、由良の法燈国師に参禅した時のありさまを次のように書いている。

国師が、『無門関』にある「念起即覺」の話をした時、一遍上人は、

となふれば仏もわれもなかりけり

南無阿弥陀仏の声ばかりして

と詠んだ。国師はこれを「未徹在」といった。まだまだ徹し切っていないぞというような意味であらうか。そこで、一遍上人は更に詠んだ。

となふれば仏もわれもなかりけり

なむあみだぶつ　　なむあみだぶつ

国師は、手巾と薬籠を与えて印可したという。このように捨聖といわれた一遍上人は臨終にさきだつ、八月十日の朝、所持した經典のうち、少々を書写山の僧に渡し、他の一切の書籍記録の類は阿弥陀經をよみながら、自ら

の手で焼き捨て、「一代の聖教皆尽きて、南無阿弥陀仏になりはてぬ」と口ずさんだという。

このように一遍上人の一所不在の遊行生活は、三十七歳より五十一歳で亡くなるまで続いた。

こうした遊行の苦しい旅の様子が『一遍聖絵』には次のように残されている。

「春の霞あちはひつきぬれば、無生を念じて永日を消し、夕の雲ころもたえぬれば、慚愧かさねて寒空をあかす、かくて念仏を勧進し給ひけるに、僧の行きあひ

たりけるが、七条の袈裟のやぶれたるをたてまつりけるを、腰にまとひて、只縁に随ひ足にまかせて、すすめありき給ひけり。山路に日くれぬれば、苔をはらひて露にふし、溪門に天あけぬれば梢をわけ雲をふむ」と。また、和讃に詠んでいう。

暈一暈しきぬれば 狭しとおもふ事もなし
念仏まふす起きふしは 妄念おこらぬ住居かな
道場すべて無用なり 行住坐臥にたちたる

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏の名号は 過ぎたる此身の本尊なり
利欲の心すすまねば 勸進聖もしたからず

五種の不浄を離れねば 説法せじとちかひてき

法王軌則をこのまねば 弟子の法師もほしからず

誰を檀那と頼まねば 人にへつらふ事もなし

暫く此身のある程ぞ さすがに衣食は離れねど

それも前世の果報ぞと いたむ事も更になし

詞をつくし乞ひあるき へつらひもとめ願はねど

僅かに命をつくほどは さすがに人こそ供養すれ

それもあたらずなり果てば 飢死こそはせんずらめ

死して浄土に生れねば 殊勝の事こそ有るべけれ

世間の出世もこのまねば 衣も常に定めなし

人の著するにまかせつつ わづらひなきを本とする

小袖帷子紙のきぬ ふりたる蓑蓑のきれ

寒さふせがん為めなれど 有るに任せて身にまとう

『百利口語』

一遍上人はこうした苦しい遊行をつづけ、多くの人々に仏縁を求めて六字名号を記した小さな札(念仏算)を、会う人ごとに手渡していった。

たまたま熊野遊行の折、一人の僧に行き会った。その時、一遍上人が、「一念の信をおこして、南無阿弥陀仏となへて、このふだうけ給ふべし」とさし出すと、僧は「いま一念の信おこり侍らず、うけば妄語なるべし」といつて受けてくれない。くり返し上人が「仏教を信ずる心おはしまさずや、などかうけ給はざるべき」と。僧「経教をうたがはずといえども、信心のおこらざる事は、ちからをよばざる事なり」と。

その時、大勢の人々が集まってきたので、もし、この僧が札を受けてくれなければ、他の人々も受けてくれそうもない気配を感じた上人は「信心がなくとも受けられよ」と札を渡した。他の人々も皆これにならって札を受けた。『一遍上人絵詞伝』によれば、このとき出会った僧は律僧であつたという。律僧であつたなら、このような心で札を受けることは不妄語戒を犯すことになる。一遍上人はもしそれが自分の身であつたらどうであろうかと思ひ悩み、これからどうしたら不信の者に正しく賦算を続けることが出来ようか、と熊野本宮証誠殿に参籠して、権現の神意を仰いだ。その夜、山伏すがたの権現があらわれ、

「融通念仏すすむる聖、いかに念仏をば悪しく勧めらるるぞ。御房の勧めによりて一切の衆生はじめて往生すべきにあらず。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定するところ也。信不信をえらばず、浄不浄をきはらず、その札くばるべし」

と。この神勅によって後、一遍上人は始めて他力本願の深意を領解するに至ったといわれる。

柳宗悦先生はその著『南無阿弥陀仏』の中で、次のように述べる。

また法然上人は教える。——「口に名号を称えよ。汝の往生は契われている」と。

さらに親鸞上人は言う。——「本願を信ぜよ。その往生は決定されるのである」と。

一遍上人はさらに説き示す。——「既に南無阿弥陀仏が成就されているのである。人の如何に左右されるのではない」と。

人の往生を云々する限り、まだ自力を去ったとは言えない。往生は南無阿弥陀仏おのれなりの力なのである。

何ぞわが罪、わが愚、わが不信に六字が犯されよう。何ぞわが浄、わが信に六字が守られよう。名号はそれ自らの名号であって、信と不信とも左右されない。罪と不罪とも動揺されない。念仏宗はいつか時宗に達すべき歴史を孕んでいたのである。それは、ひたすら南無阿弥陀仏を唱えるものをして、おのずと確信させる一つの受け止めも方であるといえようか。

「浄土」教化トラクト

『浄土宝暦』

B6判・表紙共四十ページ

定価 一部四十八円

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の施本となります。どうぞ広くご利用下さいますよう宜しくご注文をお願い申し上げます。

発行 法然上人鑽仰会

ふるさと紀行

京都の走師



とがわ れい しゅん
戸 川 霊 俊

(大阪工業大学教授
京都・黒谷西住院住職)

一日一日、京特有の北山時雨の訪れ毎に、日増しに真紅に燃えしきっていった楓の葉が、木枯らしに漸く枝を離れるころ、真正極楽寺俗に真如堂の「お十夜」の十日十夜打ち鳴らされる双盤の音が、さむざむと京の冬のことぶれを告げる。

むかし、そのすすする音が比叡のお山まで聞こえたという「お十夜」結願の通夜の明けがたの浄斎のお粥は、来る年の無病息災を願い、殊に中風のおまじないと祈る古い善男善女たちの今に伝えるなつかしい土俗の一つでもある。

真如堂の「お十夜」が済むとお東の報恩講である。

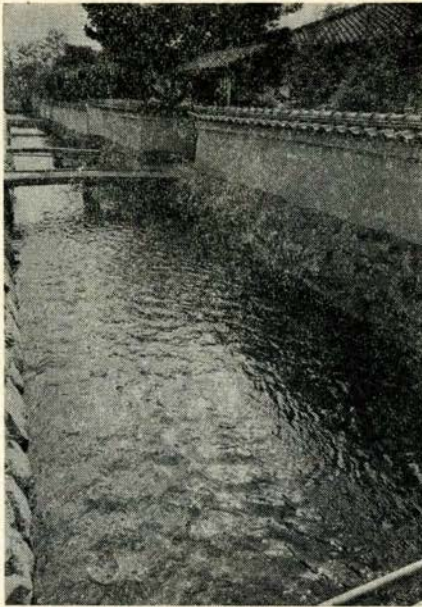
宗門に波風の劇しいこの頃であるが、それだけに、ひとしほ宗門を憂い、ご開山聖人を慕うて、歎異抄の文字通り、「十余ヶ国の国の境を越えて」信の一念に燃えた道俗衆が、ご本山の地京へ京へと上ってくる。土徳の香り濃い北陸は加賀能登の、東海は尾張美濃の門徒衆の敬虔なお念仏の声が京の街にひとしきりである。

聖人流罪の日、荒海に木の葉とゆれる舟中に念仏を高らかに唱えられたご苦難の日を偲び、御堂衆が五体を劇しくゆり動かせての鯨波のような坂東節の大きなうねり

は、それこそ報恩講の感激のクライマックスであろう。

大師堂にあふれる同信同行の満堂をゆるがさんばかりの御和讃の斉唱は、さすが親鸞聖人の教え、いまここに生きてありの感が深い。

報恩講のご満座となるころ、四条の南座には顔見世興行のまねぎ看板がかかる。この世界独特の勘亭流の筆蹟も鮮やかに、東西の歌舞伎俳優の名が、づらりとならぶと今年ももう師走という感じがひしひしと迫ってくる。



上賀茂神社・社家の町

阿国歌舞伎発祥の地でありながら、歌舞伎芝居は東京大阪のものとなり、年中寥しさをかこたねばならぬ京では、師走の顔見世がひとしきり待ちこがれられる。歌舞伎愛好者というでなくとも、年一度の、この顔見世芝居を見ずしては新しい歳が迎えられぬという一つ一つの心のしきたりが誰にも彼にもしみわたっている。

安からぬ観劇料のためには、平素からちまちまと掛金をしておくし、昼夜通し料金で全幕見られる初日のためには発売前々から夜寒むを覚悟で徹夜のすわりこみもいとわない。

祇園の舞妓たちの一階棧敷での総見は、華やいた劇場の雰囲気、一層の華やかさを加えるが、古典演劇研究の名目で、国文学の教授の解説付の、さる女子大学の三階席での恒例の観劇も、それとは別の華やかさを添えるものであろう。

京は、また臨濟五山の地である。

師走の街の喧騒をよそに、静かに南禅・大徳・相国・建仁・東福・妙心の諸山の僧堂が臘八接心に入る。

洛北一乗寺のあたり、ただ一つの円光寺尼僧堂でも、ただ今、うら若き尼僧によって、直至人心見性成仏の禅

座が真剣に行ぜられていることであろう。

臘八の声を聞くと、盆地らしい京特有の底冷えが厳しくひしひしと肌身に迫ってくる。

去年の十二月八日は、教え子の若い女性が仏門に入つて剃髮得度するという、私にとっては終生忘れぬ聖日となった。

学窓の日、哲学の講義で私から西田哲学と禪のかかわりを聞いた彼女は、禪にいたく心ひかれて、年末、私の私淑する南禅寺の今は亡き柴山全慶老師の会下に入る。更に鎌倉円覚寺に、酷寒の越前志比の曹洞宗大本山永平寺に老師の提撕ていしを求めて、遂に仏縁の不思議の糸にひかれて、斯の日、洛北の日蓮の名刹妙頭寺での出家得度となる。

「私は、禪を捨てたのでない。禪のお蔭で法華經の尊さがわかったのです。私において禪がなければ日蓮聖人の教えは生きない。日蓮上人によってこそ禪は又生きるのです」

——先生との出会いがなかったら、私の求道出家はな

かったでしょう——

その言葉に招かれて、彼女得度の日、臘八のその日、私ははじめて日蓮宗の本山妙頭寺の山門をくぐった。

この日、京は今年初めての小雪が舞い、洛北西陣の空は一入の寒さを覚えた。

「今 汝が為 頂髪を剃除せんや否や」
「唯 願くは剃除し給へ」

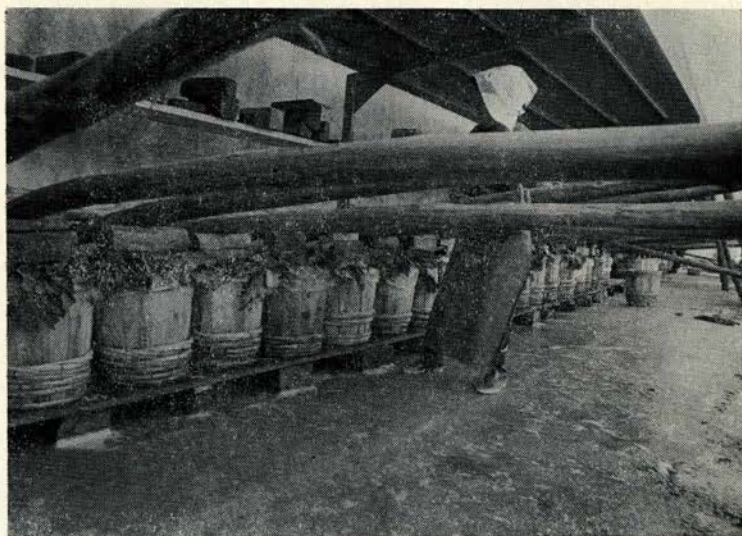
貫首沖鳳亀老猊下に応へる凜とした彼女の声に、そこには、もう若き妙齡の多田悦子は無く、日蓮上人の末孫の弟子妙鳳日香が誕生があつたのだ。

世間並みの女の幸福を超えて、大きな幸福を求めて入門した彼女には、更に厳しい仏道修行の試練が待ちかまえていることであろう。

十三日の事始めをむかえると、何処とも同じに京の師走もあわただしい。

茶華道の家元への暮れの挨拶。わけても儀礼の厳しい花街でのお師匠さんへの挨拶。

寺へも暮れの挨拶をかねての、墓掃除の参詣がぼつぼ



すぐき漬けの風景

つ、この日あたりから始まってゆく。

十月のはじめ頃から、戸外の大きな重石の樽に漬けられた上賀茂特産のすぐき漬が、白い肌にはんのりうす紅を呈して、好ましい酔っぱさで食膳に上るのも、この頃からであらう。

このあたりも、だんだん宅地化して、丹波の亀岡あたりで栽培されたものが殆んどであるらしいが、それでもわづかながら今に残る上賀茂の土壌に育てられたものの味が最上とされる。千枚漬とはちがった京の冬の味覚であらう。

ふと見上げる大比叡の嶺、北山連峯に白いものを見る。

北山連峯に雪を見ると、まことに京の師走も、すでに真冬だとの感が深い。

囚われて

無き教へ子の家訪へば
比叡の山は冬空に澄む

思想運動の故に獄窓に囚われた教え子を想い、その家

庭を慰めんとて訪れられたフランス哲学の九鬼周造博士のこの歌は、この国の夜明けを信じて厳しい思想運動に殉がんとする愛する教え子への無限の師情はさりながら、冷厳な山国京都の冬を歌い上げて至絶であると云えよう。

教え子の家とは北白川のあたりであろうか。或いは鹿ヶ谷浄土寺のあたりでもあろうか。

時遷り、師も教え子も共にすでに亡く、されど、比叡、北山の連峯は今日も師走の冬空に「故山依然」である。

「しまい弘法」に「しまい天神」。世のうつりとともに、京の年中月々の行事は廃れてゆくが、京を南と北にわけての二十一日と二十五日のこの信仰行事は、今に人氣はすたれない。わけて師走のこの両日は、終日境内は雑踏のルツボと化する。

二十一日が曇りなら二十五日も。弘法さんがお天気なら天神さんも。古着から植木からなんでもの我楽多市で、時には素晴らしい堀り出しものもがなと南無大師遍照金剛とだき合せの庶民の行楽ともなる。

めざす「大学受験合格」「高校合格」の祈願札が、社

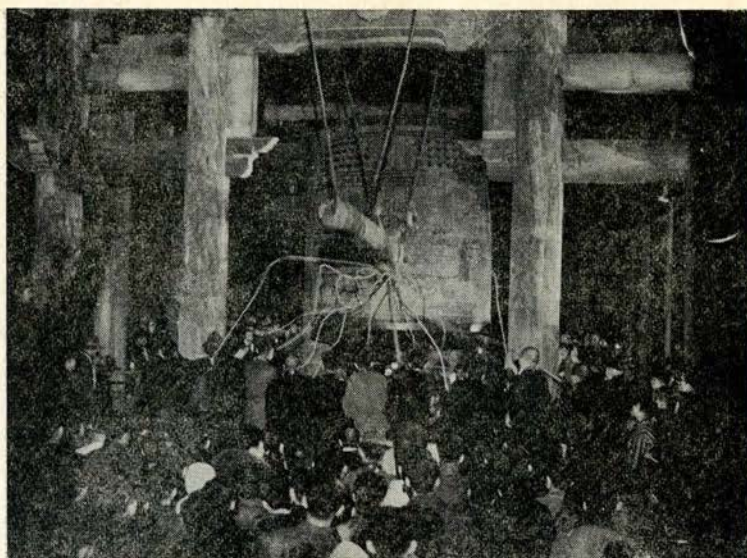
殿裏の「神牛の像」の格子窓にぶらさげられるのも、この今日あたりからである。

むかし神仏習合のころの名残りに神宮寺であった、一乗寺の門跡曼珠院から天満宮に拝礼の使僧の立つのも、しまい天神のこの日である。

東山総本山知恩院——伝宗伝戒の加行も無事に終えて、宗門の明日を荷負う青道心たちが、眈を決して仰ぎみる法然上人像。

蕨長けたご門主猊下の、柔らかなみ手の羽二重の布が静かに度しやかに大師像に触れられて、この一年の御像のほこりが拭われ清められてゆく。純心な幾百の青年僧たちと、それに和する満堂の念仏の信者たちの称名の声が、寒々とした大伽藍に執氣をこめて華頂山の空気をどよます。聖なる師走のひとつき——この日、祖山のお身拭い式。

街の一日クリスチャンの狂騒をよそに、新島襄の精神を今に伝える同志社の真白いガウンのクリスマスキャンドルサービスの隊が、繁華街に、しばしの敬虔な雰囲気をかもしてゆく。聖公会系のミッションスクールの聖歌隊のコーラスが、冷えた師走の宵に、ほのぼのとした一



総本山知恩院・除夜の鐘

抹の暖かさを伝える。

師走も、あと、もうわづか。

「火縄いらんか——」「火縄いらんか——」火縄売りのかまびすしい声を聞きながら、人の群れの足は祇園の社へとつづく。八坂神社のご神火を火縄にもろうて、家の竈にうつして新しい年の元旦の雑煮を炊いて初春を寿ほぐのが、今にすたらぬ京の年の始めのいとなみである。

柏手を打つ音、神鈴を振る音。いつもは広い境内も、さしも今宵は身動きも容易でない一寸刻みの歩みとなる。

おちこちから打鳴らされる百八煩惱の除夜の鐘。中にも華頂の峯から響く知恩院の大鐘は、流石に数十の一山大衆の力を結集してのものだけに、殷々と梵音は余韻嫋々と都の空遙かに流れてゆく。

時に、学生の町、京大の時計台の電光盤が十二時を示す。

師走は消えて、新しい時の刻みが……。

(一)(冊)(の)(詩)(集)

『青いたそがれ』

吉水まさみ 著

知っているあのこと

言えないあのこと

ひみつのひとつひとつが

ふえてゆくたびに

それだけ大人になっていく

そんなちっちゃな喜びを

私はこっそりかぞえている

「ひみつ」・「小景小歌」より

こんなやさしい小さな詩が、ひとつひとつ、おそらくは祈るような想いで作詩されたのであろう。そして、こ

のかそけくもはかない心の世界が、白い紙片の一葉一葉に短かい詩の言葉と変って記し写され、ここに集録されたのである。吉水まさみさんの第二詩集『青いたそがれ』は、そうしたひそやかな、ほんの片隅に漂う心のあり様を、じっと凝視していとおしんで育んだいのちの結晶である。その小さな珠玉の詩篇の数々を鑑賞すると、喜怒哀楽や愛憎、信不信といった日常世界を織りなす雑踏のような人間感情は、はるかかなたに消え去ってしまう。

このように、詩人の眼差しの穏やかな謙虚さが、じかに伝わってくるような、そんな詩集である。しかも、どの一篇をとってみても、詩人が随分と長い時間をかけて苦吟した結果の、それこそやつの想いで詩語として結びつけた、その努力が刻み込まれている。確かに、韻文には長たらしい冗長散漫な文章は必要としない。しかし、この言葉少なき文字の一群には、あらゆるものを静かに包み込んでしまうような大きな配慮がある。たとえばそれは、人間本来の心根に宿っているという「仏性」

のようなものか。あるいは、仏、菩薩の△慈悲▽にも比べられるべき営みか。もとよりこのような感想は、各自詩を読む人々の心に任すべきことであつて、ことさらに私が喋々すべきことでもない。

そう、そのような大形なことを述べない方が、実はこの詩集にはふさわしい。「小景小歌」、「ファンタジア」、「少年の日に」、「少女点描」、「提北拾遺」、「愛と別れ」、「青春残像」という七つの小詩篇に収められた六十二篇の全詩は、そんな詩評を拒んで、むしろ道野辺にそつと咲きほころぶ名もない草花のように、おとなしくそつと並べ置かれていただけである。

この詩人の吉水まさみさんは、「五十年の人生、その半分を病床ですごしてきました」と、その「あとがき」にも記されているような厳しい人生経験を歩んでこられた方である。しかし、その詩篇の作り出す世界は、「やさしさのある歌、たのしい歌、やすらぎを与えてくれる歌」そのものであるといえよう。その美しい詩句のひとつを掌中に収めれば、胸の奥が熱くなって、なぜかやる瀬なくなってしまう。多くの人に読んでもらいたい作品であり、心ある人の興味を喚起したい。

冬の太陽は

ななめに射してくる

愛もまた 遠くから

ななめに照り映える

〔冬の愛・△愛と別れ▽より〕

△付記▽

「吉水まさみ詩集」は、現在まで次の二冊が出版されています。

○『泣き虫小僧のうた』（第一詩集）

B 6判・一三〇頁・定価五〇〇円

昭和四十六年十二月二十日刊

○『青いたそがれ』（第二詩集）

B 6判・一二二頁・定価五〇〇円

昭和五十二年九月二十日刊

発行

〒120 東京都足立区中川三―三―五

正憶院善応寺（振替・東京六―八二二五八）



法然上人の問答から教えを求む(三)

よしむらたかし
吉村孝

『問 本願の一念は、尋常の機、臨終の機に通すべく候歟。

答 一念の願は、二念におよはさらむ機のためなり。

尋常の機に通すべくは、上尽一形の積あるへからず。この積をもてこころうへし、かならず一念を仏の本願といふへからず。一念十念の本願なれば、強にはけますとも有なんと云人のあるは大なるあやまり也。設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺といへる本願の文の中には、平生の機あり、臨終の機あり。乃至は平生の機、十念は臨終の機なり。平生の機は乃至十年申て生札、乃至一年申て生れ、乃至一月申て生れ、乃至一日申て生れ、乃至一時申てむまる。是みな寿命の長短、発心の遅速による也。此等はみな一たひ

発心して後、浄土まで申へき尋常の機なり。臨終の機といへるは、病せまり命一念十念につつまりて後、知識の教によりて、初て本願にあへる機也。臨終のために発し給へる一念十念を平生に引上て、一念十念にも生れは、念仏はゆるけれども、往生不定には思へからずと申人は、ゆゆしきあやまり也。念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故の積は、数返つもらむおも、本願とはきこえたるは、たた本願にあふ機の、遅速不同なれば、上尽一形下至一念と、おこしたまへる本願なりとこころうへきなり。かるかゆへに、念仏往生の願とこそ、善導は積したまへと』

私解

問 仏が衆生を救おうとして立てた誓願のひたすらな
思い（南無阿弥陀仏と仏名を称える念仏のこと）は、平生の
時の機（機根のこと）で、誰にでも具わっていて、仏の教えを受
けた時は動きたす根本の能力のことと、臨終（いまわのき
わ）の時の機と両方に通じるものでしょうか。

答 その一念の願は、次の一念に移るためのものであ
る。これは平生の機に通ずるべきものであるので、一生
を通してこの一念が及ぼすと考えてはならない。この解
釈を心得ていなければならない。必ずこの一念を仏の本
願であるといつてはならない。もし一念十念が仏の本願
であるから、特に励まなくてもよいのだという人がある
とすれば大変な誤りである。『無量寿経』の四十八願の中
の十八に「たとい、われ仏とならうとする時、一切の人
が、心から釈尊の教えを信じて、極楽浄土に往きたいと
衆つて十念を行じて、若しそれで浄土に往くことができ
なかったとすれば、わたしは仏にはならない」という仏
の本願の文の中には、平生の機と臨終の機は含まれてい
るのである。従つて平生の機である一念は平生の機であ
り、臨終の機である十念は臨終の機であると教えており
ます。ここに一念と十念と二つ挙げてありますが、次に

この説明がしてあります。

平生の機によつて十年念仏申して浄土へ往ける人もあ
り、一年申して往ける人もあり、一月申して往ける人も
あり、一日申して往ける人もあり、また一時申して往け
る人もある。これらの人々は皆その人の寿命の長短によ
つても異なるし、又、発心（悟りの心を起すこと、仏道に入
ること）の遅い人速い人によつてもこのように異なるも
のである。

これらは皆、一たび発心して後に、浄土へ到達するま
で申さねばならない平生の機である。この教えによつて
仏の本願のこの一念は常に相續することが説かれていま
す。次に臨終の機の説明があります。

臨終の機というのは、病が迫つて命が一念十念を行ず
るほどの極めて僅かな時間になつてきた時に、知識（普
通の知恵者とは意味が違つて、人を仏道に導く縁となる人で、
僧侶のこと）の教えに導かれて初めて仏の本願を体験する
ことができる機のことである。

若し臨終の時に発す一念十念を平生の時まで引き上げ
て、一念十念で浄土に往かれるのであるから、念仏修行
はゆるやかなものであるけれども、往生できるといふこ

とが不確定だと思つてはならない（必ず往生できる）と云う人があれば、その人は恐ろしい誤りをしているのである。

一念の念仏を捨てずに続けている人は、正しく仏道を歩んでいるということが出来る、これは仏の本願にさからわずに随っているからである。この解釈は、数多く念仏することが本願であると自然に耳に入るのは、ただ本願を会得する機の遅い速いが皆同じではないから、上は一生継続することから下は一念を行することを本願として仏が教えたものであると心得るべきである。このようになわけでこの一念の行は極楽の悟りの境地へ辿り往ける願であると解釈しなさいと善導大師は云っていると法然上人は教えております。

この一念は浄土宗念仏の基礎でありますので、法然上人のこの解説はよく学んで実践したいものです』

『問 至誠等の三心を真し候へきやうおは、いかかもひきたため候へき。

答 三心を具する事は、たた別のやうなし、阿弥陀仏の本願に、わか名号を称念せよ、かならず来迎せむと、

おほせられた例は、決定して引接せられまいらせむすると、ふかく信じて、心念口称にもうからず、すてに往生したるこちして、たゆまざるものは、自然に三心を具足するなり。また在家のものとは、かほとにおもはされとも、念仏を申すものは極楽にうまるなれはとて、念仏をたにも申せは、三心は具足するなり。されはこそいふにかひなきやからともの中にも、神妙なる往生はする事にてあれと』

私解

問 至誠心、深心、廻向発願心の三心を自分のものにするにしたい時には、どうしたらよいでしょうか。

法然上人は「三心義」と題してその中に次のように説明しております。

一に至誠心というは、真実の心なり。身に礼拝を行じて、口に名号を称えて、心に仏のかおかたちを想うのに皆真実を用いなさい。一口でこれを云えば、われわれがいる汚れたこの現世を厭い、仏のいる清らかな国をよるこんで身、口、意の善行を行ずるのも皆真実をもって努めなければならない。

二に深心というは、深く信ずる心である。これには二通りある。一つには自分は自分を中心にしてすべての事を考え、人の迷惑になる事でも平気でやるような罪惡の身で、生まれる前から六つの迷いの道をぐるぐる廻っているの、極樂往生には縁がない者であると信ずること、二つにはそのような罪人であっても、仏の強い力を縁として、必ず往生できることは疑いないので思いためらうようなことがあつてはならないと信ずることである。

三に廻向發願心というは、過去及び現在の身と口と意の行いを修行する時に、そこから生ずる一切のよいむくいを実際の心をもって、皆極樂に往くために振り向けて、極樂に往生することを喜び求めることである。これを廻向發願心というのである。

この三心を身につけておれば必ず往生できると法然上人は教えております。これは最も重要な教えですから是非忘れないようにしたいものです。

深心の文中に罪惡の身であることを自覺せよと教えたことは、敬尊が増上慢（他の人を輕んじて自分だけをよしとする心がつけ上りうぬぼれが強く高ぶって人を侮ること）は仏

道修行の妨げとなるから取り除くように努力せよと到る所に説いていることを私達に易しく説いて下さった尊いお言葉であります。

答 この三心を身につけるといふことは、特別のことではありません。阿彌陀仏の本願に、わが名号（南無阿彌陀仏）を声を出して称えれば、必ず迎えに来て下さると仰せられているので、それは疑いなく、阿彌陀仏が衆生を極樂淨土へ導いて下さると深く信じて、心で念じ口で称えることも、なんとなく気が進まないというようなこととなく、すでに往生した心持ちで、油断しないで念仏を続ければ、三心は自然に身にそなわってくるものである。また在家の信者たちは、これほど深くは思っていないけれども、念仏を申す者は必ず極樂に生まれるものであるから、念仏だけでも申せばその中に三心はそなわっているのである。それだからこそ、つまらない者の中にも、不思議と思われる往生ができるものなのである。

『問 臨終の一念は百年の業にすくれたりと申すは、平生の念仏の中に、臨終の一念ほと念仏をは申しいたし候ましく候やらん。』

答 三心具足の念仏はおなし事也。そのゆへは、観經にいはく、具三心者必生彼国といへり。ひつの文字あるゆへに臨終の一念とおなし事也』

私解

問 臨終の時の一念は永年の修行より勝れているということは、平生の念仏の中に、臨終の時と同じ念仏は申せないものでしょうか。

答 至誠心・深心・廻向発願心の三心が具わっている念仏の一念は臨終の念仏と同じことである。その理由は『観無量壽經』に「三心を具える者は必ず彼の国（極楽浄土）に生まれる」と書いてあります。その經文の中に必ずという文字があるから平生の一念も臨終の一念も全く同じ事である、と法然上人は教えております。平生の一念と臨終の一念との軽重に就いては問答の他にもよく出てまいります。念仏は一念の積み重ねの修行が説かれておりますので、一生の間に少しの時間でも無駄にならないように念仏を行することが私達念仏信仰者の歩むべき道であると堅く信じたいものであります。

○ご案内

今年もはや師走十二月を迎えました。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

さて本誌でも、諸方面より要請もありまして、「浄土句集」のコーナーを設けることになりました。選者には、ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）をお迎えして、誌面の一層の充実をはかりたいと思います。

皆様からのふるってのご投句をお待ちします。

◇要項

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中具服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛



念佛ひじり三国志

(四十四)

—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

「四十八巻伝」の巻十一に正行房は登場する。しかも彼の名が記録されるのは、法然諸伝のなかで、このくだり一箇処だけである。

門弟正行房、心中ニアハレ房籠リトテ余ノ所ヘハ
マシマサズシテ、九条殿ヘノミ参リ給フコト、シ
カシナガラ檀越ヲヘツラヒ給フトコソ人ハソシリ
申サンズレ。然ルベカラヌワザカナト思ヒテ寢タ

ル夢ニ、上人汝ハワガ九条殿ヘ参ル事ヲソシリ思
フナト仰セラルルニ、イカデカサル事候ベキト申
セバ、汝ハサ思フナリ。九条殿ト我トハ先生ニ因
縁アリ。余人ニ準ズベカラズ。宿習限リアル事ヲ
知ラズシテ謗スル心ヲオコサバ、定メテ罪ヲ得ベ
キナリト仰セラルルト見ル。サメテ後上人ニコノ
由ヲ語り申シケレバ、サテサゾカシ先生ニ因縁ア
ル事ナリトゾノ給ヒケル。御帰依他ニ異ナルホド、
マコトニ只事ニアラズゾオボヘ侍ル。

かねて正行房は心中で師の法然の行動で一点だけ釈然

前号のあらすじ

としないものを感じていた。それは東山の禅房に籠居して全く他出しないのに九条兼実の邸へは瀬々と出かける。兼実は当代きつての貴人である。法然のスポンサーだ。だからこの大檀越に媚びへつらっているのではないか。

ところが正行房の夢に師の法然が現れて、

「九条兼実殿とは先生（せんじょう）に因縁がある。ほかの人間とは違うのだ。だから誤解してはいけない」と告げる。

眼がさめたあと正行房はこの旨を法然に語ったら、

「たしかに先生に因縁があるのだ。御帰依は他の人と異なるのだ」

とおっしゃった。

要するに法然が他をさしおいて、九条関白兼実へ接近することに正行房が不審をいだいたくだけである。

同じ「四十八巻伝」は巻二十七で熊谷入道が九条邸へ出かけた模様を紹介している。

法然のお供をして熊谷は伺候したが、屋敷の中へ入れてもらえなかった。沓脱ぎのところで縁先に手をかけて、あたかも番犬のような姿勢で待機していた。室内か

確かに、領地問題をめぐっての、叔父久下直光との争いは泥沼であった。鎌倉の御前評定においても、久下一派は梶原平三景時らと組んでの陰謀の動きもないではなかったが、熊谷次郎直実は、この確執の根本の原因をみずからの存在にあると察知して、決然出家に心を馳せた。その背景には、もちろん安楽や住蓮から教えを受けた浄土門があったことはいうまでもない。

狂態を装っての評定所からの突然の逐電は、長子直家をもつて熊谷郷の所領安堵と無事に相なった。そしてしばらく伊豆山に身を伏せていた直実自身も、京都東山大谷の禅室に法然上人を訪れ、念願の思いを果たすことになった。

らは法然が兼実に語る法語がぎれぎれに洩れてくる。

もっと詳細に聞きたい。いらだった熊谷はわめいた。

「ああ、この現世穢土は嫌なところだ。浄土極楽なら、こんな差別待遇はないであらうに。ご法語は平等に聞法出来るであらうに」

兼実はその音声にびっくりし、法然にたずねる。

「あれは熊谷の入道と言って最近関東からやってきたクセ者でございます」

クセ者。後世で言う曲者ではない。癖者ぐらいの意味

<九条兼実邸にて>



であろう。短気で場所柄もわきまえぬような男、ぐらいの呼びかけと解して良い。

兼実は、ただやさしく、

「ここへ召しなさい」

と言った。

熊谷は上がりこんで法語を聴聞出来たというのである。

紹介されたエピソードのねらいは正行房の場合と全く同じで、階級差別を一切排除したはずの法然が、九条兼実だけを特別扱いしていることへの批判である。

「熊谷が九条邸でわめきちらした時を、義山の註釈「翼賛」は建久八年春ノコト、としている。

正行房の夢告も、前の文章から継承して考えると、これまた建久八年になる。前の文章とは、法然が選択本願念仏集を安楽房遵西に書写させ、彼がおごった言葉を放言したため第三章までで中止させ、あとを直弟子の真観房感西に交替させた、という記述である。これも建久八年のこととしている。

翌九年に法然が書いたと言われる「没後起請文」(遺言)で、感西は内弟子、安楽房は年来の知己同志として遺言

の証人にえらんでいる法然である。手びしい選択集書写の交替劇が事実であったかどうか。

筆者はむしろこの交替劇に続いて、正行房のひそかな法然批判を紹介するあたりに、四十八伝作者の意図を嗅ぎ取りたくなる。つまり法然の古くからの周辺は、近ごろ念仏ひじりのグループ内で俄かに頭角をあらわしてき、師の法然を引きずりまわして政治的動きを露骨にする安楽房を強く批判したいのではなからうか。

それにしても時間と言い、同じ批判の内容と言い、正行房と熊谷直実はこの「四十八巻伝」のなかで、言葉や交流こそないが形影寄り添うようにして立っている。全く偶然の一致であるかの如くである。

ところが建久八年（一一九七）から昭和三十七年（一九六二）へ、じつに七百六十五年を経て、突如として両者は結合したのである。奈良の興善寺から偶然に発見された書簡は、正行房が熊谷入道を紹介して欲しい法然に依頼した内容であった。法然は欣然としてこの依頼を受容する。

又くまかへ（熊谷）の入道のこと、くわしく申つ

かはして候。

そして正行房が発起したと推量される「念仏結縁状」にも判然と、

れんせい蓮生念仏百万へん、けち江ん志万いらす

と依頼の成就を実証している。

これこそ七百六十五年目にしてみのった「先生の因縁」であろう。先生——とは、前世と解釈していい。筆者らは埋もれた史実の恐しさをひしひしと感ぜざるを得ない。

では正行房が夢で告知され、法然も肯定した九条兼実との前世の因縁とは、何のことであらうか。

「四十八巻伝」の注釈者は、この先生の因縁について

覚束ナシ。タダニ夢ノミナラズ、サメテモ、サゾカシトノ仰セゴトナリ。モトヨリ権化ノ御内証アル事知リヌベシ。風情実に測リガタキコトナリ。

と匙を投じている。そして正行房の正体についても、

未考

なのである。

二

法然諸伝のなかで、わずかに正源明義抄が第十二「月輪殿御対面の事」で、先生の因縁らしき搜話を描出する。

少年法然が比叡を目ざして故郷美作を出立し、卯月一日に着京したときだ。京の街筋を歩いていると、貴人の行列にゆき会った。見物人に訊くと撰録月輪殿だという。関白忠通の行列だ。忠通は兼実の父親である。

行列が法然の立つ下がり松にさしかかったとき、馬上の忠通はじっと少年法然を凝視した。

いったんはゆき過ぎたが、使の者を寄越して召した。

「どこへゆくのか」

「はい、叡山へ登って仏法を学ぶつもりです」

法然はきはきと答えた。忠通は怜利そうな少年の顔を深々と覗きこんで、せっかく勉強に精進せよ、と激励

した。そして、

「大学匠となり、将来はわが子兼実の師になって欲しい」

くれぐれも頼みこんだ、と描写する。

すでに叡山へ登ろうとする少年時代、父の関白忠通から依頼を受けている。「正源明義抄」はこの搜話を、月輪殿との「先生の因縁」と強張したげである。

ただし「正源明義抄」に正行房のくだりはない。熊谷、関白邸の嘆声だけを伝える。

せっかくの搜話にケチをつけるつもりはないが、いささか後世になってこじつけた造作めく。これに限らず「正源明義抄」は講釈臭が強く史料としては第一等でない。この程度の因縁では、正行房も納得しなかったであろうし、後世の読者には法然像の実像が把握しがたくなるばかりである。

法然の実像がボケると言えば、兼実の日記「玉葉」に登場する法然像も当惑の材料となる。文治五年八月一日の記述にこそ法然と法文語や往生業を談じたところがあるが、それ以後は「授戒」ばかりである。列記してみると、

建久二年（一一九二）七月二十八日、兼実に授戒。

同年八月二日、兼実に授戒。

同年九月二十九日、中宮任子（兼実の娘、宣秋門院）に授戒。

同年一〇月六日、兼実に授戒。

建久三年（一一九二）八月八日、兼実に授戒。

建久六年（一一九五）七月一三日、宣秋門院に授戒。

建久八年（一一九七）三月二〇日、兼実に授戒。

正治二年（一二〇〇）九月三〇日、兼実夫人に授戒。

と、記述するだけである。

その「授戒」の内容は何か。最後の正治二年の頃でこんな文章を書く。

女房、今日殊大事発。仍請_ニ法然房_一令_ニ授戒_一。有_ニ其驗_一尤可_レ貴々々。又渡_ニ邪氣_一之後、脚踏居、成円祈_レ之。

兼実夫人の体調に異変があつたので法然を招いて授戒してもらったら、快くなった。たいへん有難い。法然が

帰ったあと、またぶりかえしたので、成円に祈ってもらい、ようやく落着いた、というのである。

この記述だけから判断すると、法然の「授戒」は病氣治療みたいである。いわゆる法談や説法とは無縁にみえる。

正行房や熊谷入道が疑惑をおぼえた建久八年春の訪問にしても、これでは祈禱師法然への批判、と解した方が正確なようである。

だが、この時代の貴族は日記を綴る場合、多分に読者を意識している事実に留意しなければならない。心情の吐露などはつねに回避するものだ。宮廷の除目や祭事には詳細を尽すが個人の風懐となると、つとめて筆を抑制してしまふ。

さらに新しい問題に、主観を投ずることを極度に警戒もする。世俗的な權威が確立するまでは、なるべくボカしておく。法然が主唱する新思想にも兼実は伝統の慎重な態度で対応した。すくなくとも日記の表現は、既成の慣習に従った。

「玉葉」における法然像が、それまで瀕々と九条家へ出入りしていた仏巖上人と等視的なのはそのためである。

法然が初めて九条邸へ出かけた文治五年の一年半ほど前、兼実一家は深刻な衝撃を体験する。長男の内府良通が頓死したのである。

良通は二、三日来、身体の不調を訴えていたが、文治四年の二月十八日夜、突如として息を引き取った。良通の女房が狼狽して兼実の寝所へ駆けこんでくる。様子を共にゆくと、すでに「身冷氣絶」していたのである。十二歳の夭折であった。

兼実は仏巖上人をはじめ、九条邸出入りの呪術僧や祈禱師を動員して蘇生の手段を尽す、しかし効験はなかった。仏巖上人らの名がこの日を境に「玉葉」から遠ざかってゆく。

法然の「授戒」が仏巖上人らの祈禱と異質であったことは、まずその訪問度が寡少な事実で裏付けられる。

さらに「玉葉」は記述が中絶されて文章に接し得ないが、次男良経の、また兼実自身の歌作の師匠だった藤原定家の日記「明月記」で建仁元年（二〇〇）一〇月一七日、娘の宣秋門院が法然を戒師として出家し、さらに翌年の正月二七日には兼実自身が出家した事実を明らかにしている。

ただの呪術僧や祈禱師なら、出家という大事の戒師に選ぶはずがない。例えば正治二年九月三十日、兼実夫人を法然が帰ったあとと祈ったという成円などはあれきり完全に「玉葉」から姿をかき消す。

「授戒」という既成語のかげで、兼実は法然から法文を受け、充分に専修念仏の思想を吸収していたのである。

さらには九条邸へ安直に出入りする若い公卿からの「又聞き」もあり得る。

平基親などは、そのパイプ役に最もふさわしい人物と言える。

初めて法然房の名が「玉葉」に登場する文治五年八月一日の記述で、奇しくも平基親が九条邸へ現れている。

一日戌子晴。右衛門権佐長房補二年預_二之後申_ニ吉書_一。余依_ニ所_ニ不_レ出_ニ客亭_一。以_レ人伝_一覧之_ニ（加賀国郷封解文_ニ及_レ晚左大弁基親朝臣来申_ニ拝賀_一（申_ニ余及女房_一）即申_ニ吉書_一（以_レ人伝_一之_ニ今日_ニ請法然房之聖_一談_ニ法文語及往生業_一）

奇しくも、と書いたのは、この平基親は後に熱烈な専修念佛者となり、建暦二年正月末には臨終から入寂までずっと法然の枕頭に侍座した念仏ひじりだったからである。

参議正三位親範の子で左大弁兵部卿となり、建永元年（一二〇六）に出家する。基親は毎日五万返の称名念佛を積む行為を一念義の成覚房幸西に批判されたため、法然に書簡で非かどうかを問いただしている。いわば法然の晩年における有力な門弟であった。

基親は九条兼実にはいわば内輪の人間であって「玉葉」でもそんな扱いを受ける。

例えば建久五年七月七日には、

丙寅晴。法勝寺御八講結願也。雖有参入之志、依所勞不参。（中略）此夜、大將於此亭有作文事、公卿四人、兼光卿、光雅卿、定長卿、基親卿等也（後略）

大將とは次子の良経で漢文の講習会をやっていたようである。

建久六年正月十日。

成刻、参法成寺、所作起請等昨日（脱字カ）咒師二年以後、大導師畢、退出。今日、左大弁定長、兵部基親等参入。余湯漬陪膳。依無四位二家司能季朝臣勤之。如昨日一

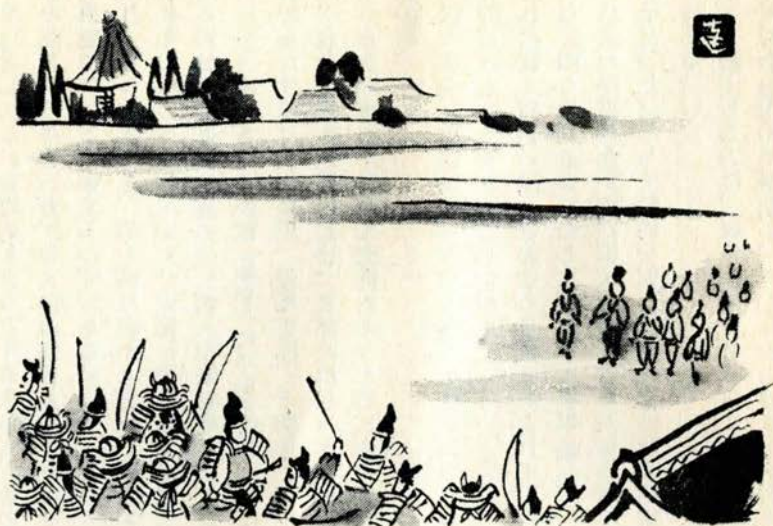
公事が終わったあと、親しく飯を共にするといった関係である。

この平基親をはじめ、九条兼実の周辺には法然義を信奉し、その手で出家した貴人が何人もいた。大納言実宗や左大臣経宗などはその代表的な人物だ。「玉葉」に直接の記述はなくても兼実が法然義へ没入していったことは容易に推量出来るであろう。

三

さて、文治四年の二月に長男良通に頓死され、九条兼実は深刻な衝撃を受けた。加持祈禱を次々におこなうが効験はなく、そればかりか次男良経の枕辺に良通の亡霊が立ったりする。兼実はこれまでの宗教観を一変しなけ

＜都大路を行進する源家の武者＞



ればならない精神の危機を自覚しはじめる。

建久年間の深まるとともに九条兼実の政治的立場はぐらついてくるのだが、それと比例して法然への傾斜が強まった、と考えても良いであろう。

また、逆に法然からすれば、権力の絶頂にいた九条兼実が、自分と出会ったことで非運の坂道を下落していった事実、何やら因縁めいた種子を感じるのは当然であろう。現実には、頓死した良通にかわって九条家の世嗣ぎとなった良経が、こんどは就寝中に何者かの手で刺殺される悲劇まで知らされるのである。建永元年（一二〇六）のことであった。

世俗の栄華を捨てて、宗教の純境へ没入してくれることは嬉しいが、やはり人間の失落図を目撃するのは悲しい。とりわけ法然は、そうした俗情や常識に理解度の深い人柄であった。

そんな風懷を“先生の因縁”という言葉に託したのもあろうか。

ところで正行房や熊谷入道が、法然の九条兼実への接近に疑念をいだいた建久八年、じつはすでに兼実は太政大臣の地位を去って失意の人となっていた。

ドラマとしてこれを観劇しようとするならば、その二年前の建久六年の春三月、都大路に熊谷入道を立たせた方が興趣はいっそう深まるはずである。

三月六日の朝まだき、都大路は鎧兜も美々しい源家の武者たちで埋め尽されていた。大路一杯に四列縦隊でひるがる武者の行進は沿道に立つ都人の眼を奪った。

初めて目撃する鎌倉佐殿（頼朝）の手勢であった。

先驅をなすのは畠山重忠、稲毛重成、千葉胤正、小山朝政、北条時連ら六騎の武將。後陣には佐々木定綱、梶原景季らかつての宇治川で先陣を争った若武者の成長した顔があった。

北面の武士どもには望み得べくもない統制ぶりと武者美を惜しげもなくまき散らしてゆく。

これに続く随兵の顔も征服者の自信にあふれていた。彼らに囲こまれるようにして網代車で將軍頼朝がゆく。八葉の牛車のなかで白衣で身を包むのが御台所の北条政子だった。そして絵柄を配した網代車は若公朝家のものである。

京へ上洛することは、坂東武者を骨抜きにする、とあれほど西上を拒んだ頼朝が、今一族をあげて、武將の悉

くを引具して都大路をゆくのである。

熊谷入道は人垣の背後でさすがに涙ぐんだ。坂東の野面でしか見なかった強大なエネルギーを、晴れ舞台の都大路で再見出来た感動であった。

見よ、この日本国を支配する武人の妻さまじい美しさを！

あれほど嫌悪した昔の世界がなつかしまれてならない。

随兵の群中に熊谷入道は、いっそうなつかしい顔を見した。わが子の小次郎直家であった。かたわらで歩くのは志賀七郎、平山右衛門尉か。どれも顔見知りだった。

彼らは自分に気づいてはいまい。たとえ視線を結んだとしても黒衣の一介のひじり坊主を、父と、かつての同輩と見抜き得ないであろう。

坊主と言えは、いつのまにか熊谷はすぐかたわらに鈍色の法衣をまとった瘦身の僧が立っているのに気づいた。

「昨夜、將軍家は石清水で通夜をなされたようだな」ひとりごつように僧は呟く。

黒衣の念仏ひじりではない。着衣も上等で然るべき身分のある僧と熊谷は見た。

いや、その横顔にどこか記憶もあった。

「お目にかかったことが……」

「そなたは熊谷入道、蓮生どのであろうが」

先方は知っている。

「どこであつたか」

「三井寺の法華八講であろうが」

「ああ、すると澄憲僧正のかたわらにおられた……」

「明遍」

短く答えて明遍は微笑んだ。

「南都の明遍僧都が今ごろこんな場所に立っていてよろしいのか」

將軍頼朝の行列は、このまま都大路を通過し、一路奈良を目ざすのである。そもそも今回の上洛が、目的は長年にわたって復興に協力してきた東大寺の供養結縁であつた。

当然、明日は東大寺で一大供養会が営まれる。明遍僧都もその法要に列するはず、と熊谷は考えた。

「いまは世捨て人。南都にも縁はござらぬ。あちのこと

は勧進上人に任かせておけばよい」

賑やかしごとの大好きな俊乗房重源の顔でも思いうかべたか。明遍は微笑は顔いっぱいにひろがった。

「あれ、あそこにゆく緋緘の武者が、わが子の直家でござる」

小次郎の隊伍は視界から消え去ろうとする。熊谷はあわてて指さした。誰でも良い。わが子の晴れ姿を見てもraithたいのである。

「さようか」

明遍はあらぬ彼方に眼をやったまま、うなづく。それほど関心はないようだ。

正直者で一途な熊谷は語り出さずにはおれない。

「一ノ谷の合戦で、あの直家が敵矢で傷つき申した。後陣へ下がらせたあと、わしは……」

若き公達敦盛との出会いを告げる。首を刎ねようとして覗いた公達の面差し、わが子直家と全く同じ年輩であつた。出家の動機となつたこの出会いを、何としても明遍に聞いて欲しかった。

「三井寺で、兄の澄憲からそのような話で紹介され申したな」

明遍は相変らず気乗り薄だ。

頼朝の美々しい武者行列の最後尾を、おびたらしい数の牛車群が追隨してゆく。

「熊谷どの、御覧なさい。これは將軍におもねる公卿たちじゃ」

「公卿たちか」

「將軍の上洛で都の空気も一変するだろう」

明遍はこの群れの方に興味が湧くらしい。

「先日、関白どのにお会いしたが、しきりに今度の將軍上洛を不審がっておられた」

熊谷は先日法然ともども九条邸へ伺候した折、法談のあと兼実の方から洩らした政談の一端を明遍に告げた。

「月輪どのが、將軍上洛の意図が不明のようでは、誰にも判りようがない」

「……」

熊谷には、その理が判らぬ。

「鎌倉どのの意中を、この都で知る者は月輪どののただけからな」

「たしかに不審がっておられた」

「はてな、それはどういうことか」

明遍は見送りにきた公卿の牛車群に眼をやりながら考えこんでしまった。

兼実は藤原一族の長（おさ）として困難な源平相剋の時代を乗り切った。大天狗後白河法皇の権謀にも巻きこまれず、同族の権益を守りとおした。平家の没落とともに鎌倉の頼朝と完全に握手し、公武合体で新たな平和時代に対応してゆく基礎を固めた。

娘の任子の後鳥羽帝の中宮に入れ、再び摂関時代の到来が約束されたかに見えた。そこへ將軍頼朝の初上洛、兩前に両者間の打合せがなかったとすると……明遍ならずとも考えこんでしまうであろう。

（つづく）

寺内大吉先生の連載『念仏じり三國誌——法然をめぐる人々』は、快調に進行中です。筆者の寺内先生も、諸資料を縦横に駆使して、ますます充実した筆運びを展開されています。皆様からの激励の便りも二、三届けられています。さうに多く読者諸兄のご感想をお待ちしています。（編集部）

二 編集後記 二

○月日の過ぎ行く速さには、まことに恐れ入ってしまう。昨日、陽春を慶賀して新しい年のはじめの誓いを立てたばかりなのに、今日はもう十二月の声を聞くことになつてしまった。「一刻千金」の世の中に、ことさらに忙しく、ただただ慌ただしく日送りしてしまつた後悔は、今さらなんの役にも立たない。中国の古人は、「山中に暦日無し」などとのどかな境地を楽しんでいたが、私の心には、

少年易「老」学難「成」、
一寸「光陰」不可「輕」
（カウシキ）

という朱熹の驚世の詩句が鋭く響く。「螢の光」や「窓の雪」を用いて努力した人たちの功業を知るにつけても、私の精進のなんと怠りがちなことであつたか。年末のせわしない日に任せて、ますます雑踏の日常

茶飯事に埋没してしまふ自分自身がいらだたしい。

○仏名会（ぶつみようえ）は、こうした師走もおしつまつた一日、仏のみ名を静かに称名して、積もり積もつた心の垢を払い落とすための法会である。忙中であつて、ひと時、静寂安穩な時間を過すことは、人間の肉体と精神の安定と浄化にはきわめて有効な方法であらう。年の暮れの時分、一時も一刻も惜しい折柄、あえてこうした時間に身を任すことは大いに意味のあることである。浄土宗では、「御仏名」とは「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えることである。だれにはばかることもなからう。魂棚に向つて、一年の反省をこめてくつろいだ時間を作つてほしい。

肩たれて女人悲しや御仏名 青々
○本年も會員諸兄の暖かいご支援をいただき、弊会も一歩一歩の道を歩んできたのである。今後共、重ねてのご高配をお願いしたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 十二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十二年十一月二十五日 印刷
昭和五十二年十二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八一八二一八七番
〒一〇三

=好評発売中=

大正大学教授 竹中信常著

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価 8,500 円

◎宗教学界の権威である著者が、新しい角度からタブー理論を集大成され、さらに数々の身近な事例を踏まえて体系的にまとめられた大書である。皆様のご購読を是非おすすめしたい。

発 行 山喜房仏書林

東京・本郷・東大赤門前
電 話 (03) 811-5361

『和訳善導大師観經四帖疏』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 584頁 上製函入 定価 3,500 円

『和 訳 浄 土 三 部 經』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・註解つき

『浄土宗 檀 信 徒 の お つ と め』

折本68頁 定価190円 (100部以上一割引)

折本80頁 <小消息つき> 定価220円 (100部以上一割引)

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振 替 (東京) 8-82187